人間・失格

たとえば ぼくが死んだら

野島伸司

人間・失格

たとえば ぼくが死んだら

野島伸司

幻冬舎

〈著者紹介〉
野島伸司　1963年新潟に生まれる。大学中退米。UCLAに通う。'88年「時には母のない子のでフジテレビ・ヤングシナリオ大賞を受賞。以降、TV・映画で手掛けた作品は『君が嘘をついた』『すてきな片想い』『君は僕をスキになる』『101回目のプロポーズ』『高校教師』『ひとつ屋根の下』『この世の果て』他。

人間・失格　たとえば ぼくが死んだら
1994年 9 月21日　第 1 刷発行
1996年 4 月20日　第18刷発行

著　者　野島伸司
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©SHINJI NOJIMA, GENTOSHA 1994
Printed in Japan
ISBN4-87728-025-1 C0093

人間・失格

たとえば ぼくが死んだら

目次

第一章　イジメの法則　7
第二章　仮面の友達　31
第三章　禁じられた少年愛　60
第四章　引き裂かれた絆　82
第五章　逃げない勇気　99
第六章　最後の手紙　128
第七章　父の復讐Ⅰ　154

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第八章　父の復讐Ⅱ　183
第九章　少年の亡霊　207
第十章　残された標的　237
第十一章　最後の対決　266
第十二章　明日に架ける橋　301
エピローグ　331

僕の目をあげる、もう君を見なくてすむのなら
僕の耳をあげる、もう君の声を聞かなくてすむのなら
僕の口をあげる、もう誰とも話したくないんだ
僕はとても疲れて、このまま眠ってしまいたい

第一章　イジメの法則

狂ったように蟬が鳴いている。

都心にある修和学園中等部の兎小屋に、数人の生徒が円を描くように立っていた。皆、白地に前チャックの制服に身を包んでいる。

円の中心の藁の上に、四羽の兎の死骸がころがっていた。

「早くやっちまえよ」

一人が言った。

「分かってる」

少年の一人が、最後の一羽に手を伸ばす。兎を腕に抱え込むと、躊躇することなく、注射器を刺し込んだ。注射器の中に、鮮やかな赤い血が吸い込まれていく。

事件はその日のうちに、教師達の知るところとなった。

三年A組を担当する森田千尋（ちひろ）は、現場を見た時、背筋が凍りつくのを感じた。その週は、彼女

の受け持つクラスが飼育係を担当していたのである。
翌朝の学年会議に、千尋は少し遅れて出席した。会議室に入る時、他の教師達の視線を感じないわけにはいかなかった。校長の新藤をはじめ、他の教師はすべて揃っている。
新藤が、ハンカチで額の汗を拭いながら言った。
「暑いですな、今日は」
すぐに、学年主任の宮崎信一がエアコンを振り返る。
「フィルターが詰まってんですかね」
話を切り出したのは、教頭の羽柴だった。
「どうでもいいですけど困りましたね、例の兎殺しは。森田先生のクラスが係の週らしいじゃないですか」
「はい」
答えてから、千尋はおずおずと他の教師達の顔を見回した。
「怖いわ。かわいいウサちゃんの血を抜きとっちゃうなんて」
そう言ったのは、千尋の隣に座った数学の村田志穂だった。
「ウサちゃん！」
三十二歳で独身の村田の言葉を繰り返し、宮崎が噴き出す。それを無視して、村田が誰にともなく言う。
「やっぱり担任持たすなんてまだ早かったんでしょう」
「それは仕方ありませんよ。植杉先生が産休なんですから」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

千尋は、そう言った社会科の青年教師・新見悦男をちらりと見上げた。新見は怖いぐらい端整な顔をしていた。
「とにかく、森田先生のクラスの生徒なんですから、犯人を見つけることがまず先でしょう」
村田が決然とそう言い放った瞬間、羽柴が眉をひそめた。
「そりゃまずいな。こういうことが前に他県であったでしょう。情操教育に問題があるなんて、マスコミが大袈裟にしますからね。特に我が校のような名門進学校じゃ」
思わず、千尋は口を開いていた。
「あ、あの……」
皆が千尋を見た。思いきって、千尋は顔を上げた。
「まだ、うちのクラスの生徒と決まったわけじゃ……」
「じゃ誰だっておっしゃるの？　鍵を持ってるのはA組と事務室だけですよ。それともなんですか、あたしのクラスの生徒だとでもおっしゃるの？」
「い、いえ……」
日頃から、先輩教師である村田の千尋に対するイジメは執拗だった。それでもいつもは必死に耐えているのだが、今回は少し事情が違う。
「そういうねえ、責任転嫁するような担任だから生徒が歪むのよ」
千尋はうつむき、あふれる涙をこらえる。それでなくても千尋は涙もろいのだった。
新見が、はっきりした声でもう一度千尋を弁護する。
「放課後になれば、教壇の中にある鍵はどの生徒でも持って行けますよ。村田先生の生徒も、僕

のクラスも」
村田が不愉快そうな表情で新見から顔をそむける。
「仕方ない、鍵を壊して外部の人間のせいにでもしますか」
宮崎はそう言って、高笑いした。
「さすが体育の先生のアイディアだ」
英語教師の米田の言葉に、宮崎の顔色が変わる。
修和学園のような名門進学校で体育の教師であるという事実に、宮崎は根強い劣等感を抱いていた。生徒や他の教師達からも見下されているのではないかと宮崎は疑っていた。四十二歳にもなってまだ独り身で、見合いを繰り返しては断り続けられている体育教師の自分を、周囲の連中は嘲笑っているに違いない。宮崎はそう信じていた。
「ただの冗談でしょう。いちいち真面目に受け取らないでくださいよ」
「真面目な問題ですよ、これは」と羽柴は宮崎に言い、「ねえ校長」と新藤を振り返った。
だが新藤は、うつらうつらしている。
チャイムが鳴り、一同は会議室を出た。
千尋は、渡り廊下を歩いて行く新見を追いかける。
「新見先生」
新見が立ち止まり、ゆったりとこちらを振り向いた。
「さっきは、ありがとうございました」
ぺこんと頭を下げた。

「なにかしたかな？」
「あ、あの、助け船を出していただいて」
「そんなことなら気にしないで」
黙って、千尋はもう一度頭を下げた。
「けど、僕もどうかとは思うよ。教師がすぐ泣いちゃうってのはね」
「……すみません」
その時、新見が不意に顔を上げる。教室の窓ガラスに、生徒達の影が映っている。
「A組だな」
新見が走り出し、千尋はわけがわからぬまま彼の後を追った。

武藤和彦が、数人の同級生に取り囲まれ、恐怖に顔を引きつらせた。小柄な松野裕次が血のついた兎の人形を右手にはめ、教室の隅に和彦を追いつめた。
「これでも白状しないか。ドラキュラめ！」
「僕じゃない！　僕じゃないよ！」
他の連中が、手にした定規で和彦の頭を叩いたり、胸を突いたりする。
戸田哲雄が低い声で「吸血鬼め」と言う。
「僕じゃないんだよ」
恐怖に歪んだ和彦の目から、涙があふれ始める。和彦は気が弱く、体も小さかった。整った顔は少年というより少女のようで、肌も透き通るように美しかった。

間中俊平が、和彦の顎を右手で摑む。
「ドラキュラ」
和彦は跪き、顔を覆った。
「やめてくれよ。やめてくれよ！」
その時、教室のドアが開いた。
「おまえら、なにをしてるんだ！」
新見が大声を上げ、遠巻きにしていた他の生徒達はまるで関係がないかのように、自分の机に戻った。
千尋がやって来て、新見の肩越しに教室の中を覗き込む。
和彦が嗚咽しながら、また言った。
「僕じゃない！　僕じゃ……」
千尋が一歩進み出て、言う。
「松野君、どういうことですか」
小柄ではあったがふてぶてしい顔つきの裕次は、平然と言い返した。
「兎殺しの犯人ですよ」
「どうしてそんなことが分かる？」と新見。
「こいつんち、医者だから」
哲雄が、汚らわしいものでも見る目つきで、蹲った和彦を見下ろしながらそう言った。
「注射器持ってるでしょ」と俊平が後を受けた。

和彦はしゃくり上げ続ける。
「僕じゃない……」
千尋は新見の顔を見上げる。困惑した表情で彼は押し黙ったままだった。

大場衛は、修和学園の転入試験にパスした息子の誠が自慢の種だった。
息子に付き添いバスで新しい学校へ向かいながら、自然に口元がゆるんでくるのを感じる。誠は死別した前妻との間の子供で、後妻の夏美も妊娠している。一家は多摩川の近くでラーメン屋〈なにわ亭〉を開店するために、神戸から引っ越して来たばかりだった。
衛は慣れないスーツ姿を、窓ガラスに映してみる。それから誠を振り返った。
「どうや、この背広。ちょっと小さなってしもたけど。名門中学生の父親に見えるかな」
停車し、老婆が入って来て誠はすぐに席を立った。
「どうぞ」
「すみませんね」
老婆は衛の横に腰を下ろし、衛は自分の息子を誇らしげに見上げた。かつては社会人野球のヒーローだった衛だが、今ではラーメン屋のオヤジだ。誠にはそんな自分を乗り越えていってほしかった。
「いいよ、似合うよ、それ」
誠が言う。衛は微笑んだ。
「そうか？」

バスが修和学園の前に停車し、二人は足速に出口に向かう。
大勢の生徒に混じって、大阪からやって来た親子はゆっくり正門をくぐった。これがあの噂に高い名門・修和学園かと思うと、衛は心なしか緊張する。そんな経験は久し振りのことだった。九回の裏ツーアウト、フルベースでバッター・ボックスに立った時でもこんなに緊張はしなかったな、と思う。
職員室へ入ると、一隅にある応接スペースで、担任の森田千尋が応対してくれた。
カリキュラムや校風の説明を終えると、千尋が大きな箱をテーブルの上に置いた。
「これが制服です」
「はい」
誠が、大事そうに制服を受け取る。衛がニヤニヤ笑いながら、箱の中の制服を覗いている。
「ちょっと着てみろよ」
誠は苦笑する。
「いいよ、別に」
それから誠は、目の前の千尋に言う。
「今日は蟬はいませんね」
「受かってくれてほっとしたわ」
二人が微笑み合うのを、衛はきょとんと見比べている。誠はこの若い美人教師に会うのは初めてではなかった。転入試験を受けた時の担当が彼女だったのだ。顔に似合わずそそっかしいところがあり、試験を受けているというのに、蟬がうるさくないかとか、暑かったらエアコンを強く

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com